

最近ちょっとした社内資料を作成するにしても、AIの助けを借りずにはいられない。一部の企業に限るのかもしれないが、企業内でも使えるように調整されたAIを社員が使えるよう、会社が契約してくれているのだ。彼（AIなのに！）は親切で辛抱強く、ほめ上手でもある。さらに（たまに知ったかぶりをすることもあるが）大変物知りで学識も深く、基礎理論から現実世界への応用まで幅広く相談に乗ってくれる。

思うに、若い頃にこれがあったならば、随分楽ができたように感じる。英語の文章を瞬時に要約してくれる上、文章の作成だけでなく資料作成や校閲までこなしてくれるのだ。社内資料は「伝わること」が必須であるため、会社もAIの利用を奨励している。AIと資料のキャッチボール（壁打ちというらしい）を重ねるうちに、内容がどんどん洗練されていくのがわかる。若手の頃（30年前！）、残業して上司に指摘された資料の手直しをしていた日々は何だったのだろうと思う（しかもAIの場合と違い、その指摘に納得していないこともあった）。

この環境が学生時代からある若者が、どのような社会人になるのか楽しみである一方で、少し恐ろしくも

ある。あの無駄とも思えた時間を別のリソースに充てていれば、自分にも何かできたのかもしれないと考えるが、単に残業せず定時退社していただけたかもしれない。いずれにしても、デジタルネイティブと呼ばれる世代には期待しかない。

ところで最近ニュースで見かけたのだが、その新しい世代の一部でカセットテープが流行しているという。ランダムアクセスができない、記録容量が限られる、アナログで音楽を保存するため音質が劣化する——そうした不便さが、かえって新鮮で魅力的なのだそうだ。音楽ではアナログレコードも同様だし、写真の分野でもフィルムカメラが若者の間で復権しているという。この場合、取り扱いの不便さがむしろ価値に転じているようである。おそらく、様々な作業がAIによって効率化された結果、音楽などの趣味分野においては「不便さを楽しむ余裕」が生まれてきたのだろう。

さて、ここまで書き進めてきたこの文章をAIに校閲させるべきか、それともこのまま提出するか、悩ましいところである。どちらを選んだのかは、ご想像にお任せしたい。

（小林直樹）

カラー写真ご提供のお願い

化工誌編集委員会

本誌の目次や編集者の独り言下に掲載するカラー写真を広く会員の皆様からのご投稿をお願いしています。ご投稿いただいた写真は編集委員会で適宜選択して使わせていただければと考えています。ご投稿の際にはごく簡単な説明をつけていただき、電子ファイルの場合には高解像度のもの（300DPI以上）をお送り下さい。

以下のような写真のご提供をお待ちしています。

1. 季節感のあふれた風景・草花・野鳥・動物の写真など
2. 化学に関する写真—カラフルな物質、化学模型、電顕写真、実験機器、化学プラントなど

送付・問合せ：101-8307 東京都千代田区神田駿河台 1-5
日本化学会 学術情報部 「化学と工業」誌担当
FAX(03)3292-6319 E-mail: kakoshi@chemistry.or.jp



白馬岳 務台 潔